

2013 白球の詩

甲子園が懸かった大一番。七回、日本の二遊間を目指してきた相棒の二塁手、横須賀奎太が抜けそうな打球を横っ飛びで捕球して仕留めると、駆け寄って「ナイス」と声を掛けた。

「苦しい時、いつも笑ってくれてチームを盛り上げてくれる」。ナインにとって主将の笑顔が何より頼りになった。

小学校2年の時、地元の学童チームに入った。その時から甲子園が夢だった。硬式の太田ボーイズでは、関学附の古川幸拓や前橋商の岩崎巧らと夢を語り合った。父の孝宜さん(48)は

太田市内の自宅から通い、遅い帰宅は夜11時を過ぎた。最寄りの駅から深夜の県道を一人自転車をこいだ。「部員93人の大所帯をまとめる気配りがあった。太田から通う努力、野球に対する情熱を買った」。加藤秀隆監督(50)は主将としての力量を認めた。

2点を先行された四回、先頭で打席に入り、

主将の気迫がナインに伝わったのだろう。続く小須田創がチーム初安打となる二塁打を放ち反撃の突破口を開く。

しかし、無得点のまま試合は九回へ。最後の攻撃を前に組んだ円陣で「3点差だったら追いつける」と叱咤。最後まで仲間を鼓舞し続けた。追いつけなかった3点を「胸を張ろう」。泣き崩れる仲間いつもの笑顔で呼び掛けた。

言葉を失ったままのベリオンチ。背番号1の肩を抱り着けるとは……。きやいた。2年生の春から一緒に出場した片山悠介は、孝宜さんは主将として成長した息子に目を細めた。

戦いを終え、これまで相手チームから受け取った千羽鶴を前橋育英ナインに手渡した。主将の重責を全うし、夢が終わったと思つと、涙が止めどなくあふれ出た。

(太田支局 石田省平)

笑顔と共に去りぬ

農大二

周東 佑京主将

「体が小さくて打つても内野を越えなかった。空いている場所を任されたから、ピッチャー、キャッチー以外はどこでも守れた。器用貧乏にならなければいいが」と感じていた。農大二の主将になった時は「『うそだろ』」初球にセーフティバントを試みる。「自分が出勝負で、仲間のことなど考えられないやつだったから」。



試合終了後、ベンチでチームメイトと健闘をたたえ合う農大二の周東主将(左)